

# 創価教育研究センターにおける 大学アーカイブズ機能と課題

荻 沢 賢 一

はじめに

研修レポートのテーマは「創価教育研究センターにおける大学アーカイブズ機能と課題」である。国文学研究資料館史料館主催の「史料管理学研修会」を受講した経験をもとに、「創価教育研究センター」における史料管理のあり方を述べるとともに、大学アーカイブズ機能を持ったセンターを再検討し、種々の課題について論及する。構成にあたって、次の章立ての順序で述べていきたい。

1. 用語の定義
2. 創価大学の沿革と創価教育研究センターの開設と経緯
  - 2-1 創価大学の沿革略史
  - 2-2 創価教育研究センターの開設と経緯
3. 創価教育研究センターにおける史料の種類
4. 創価教育研究センターの大学アーカイブズ機能  
「記録史料学」のなかの「記録史料管理論」と「記録史料認識論」
  - (1) 史料の収集と整理
  - (2) 史料の保存と利用
  - (3) 研究成果の公開
  - (4) 展示活動
  - (5) 講演会の開催
  - (6) 年史編纂事業
5. 今後の課題と展望
  - (1) アーキビストの養成
  - (2) 規程類の作成・整備
  - (3) 大学の「自己点検・評価」とアーカイブズ機能のかかわり
  - (4) 教育活動としての自校史への取り組み

(5) デジタル・アーカイブの対応

6. おわりに

7. 謝辞

1. 用語の定義

最初に用語の定義について確認をしておきたい。特に30年近く図書館司書として、図書の整理業務に携わってきた実感としては、「史料」と「資料」の相違について不分明な部分があり、はっきりとは認識できていなかったが、安藤正人教授の「史」と「資」の違いについての定義によって明確になった。安藤正人教授の『アーカイブズの科学をめざして』から用語の定義を以下引用させていただく。

「資料」というのは文書館や図書館、博物館、つまり文化資源に関わる世界の中での用語法に限定すると「資料」というのは一般的、広い意味での文化的資源であらゆる形態のもの、時代も全てを含むことになる。

「史料」とはいわゆる「歴史資料」が「史料」と同義であり、「資料」の中での歴史的な資料これが「史料」である。「史料」というのは「歴史資料」の略語である。記録、レコードとして情報が蓄えられているもの、これを「記録史料」と呼び、英語で言えばarchivesであり記録物として残されているものである。記録の形態、方法は文字、映像、電子媒体であってもよい。<sup>(1)</sup>

記録史料の特徴として、安藤正人教授は「アーカイブズの思想」のなかで以下のように述べている。

- ①記録史料はもともと情報の伝達や固定化のために作成されたものだから、一般に情報の密度が濃く、情報資源としての有効性が極めて高い。
- ②他の史料ジャンルに比べ、法的、業務的な情報資源として発生源である組織体内で活用されることが多い。
- ③記録史料は組織体や個人の活動から生まれた一次情報であるがゆえに、公開利用についてほかの史料ジャンルとは異なる独自の基準や方法が必要である。
- ④記録史料は、ふつう発生源組織体の機構や活動の流れを反映した“秩序ある群”(＝有機的な構造体)として存在している。仮にある記録史料群から流出した、あるいは他が湮滅して唯一存在した1点の記録史料があったとしても、それははじめから単独で存在していたわけではないのであり、有機的構造体としての記録史料群の一部という本質は消えていない。
- ⑤現代記録の場合、膨大な記録のなかから永久保存すべき記録を専門的な観点で評価

選別する必要がある、その仕事の比重が大変高い。

次に「アーカイブズ」と「大学アーカイブズ」の定義について、『文書館用語集』から引用する。

アーカイブズ：

- ①史料、記録史料。個人または組織がその活動のなかで作成または収受し、蓄積した資料で、継続的に利用する価値があるために、保存されたもの。
- ②文書館(もんじょかん)。
- ③公文書記録管理局。

大学アーカイブズ：

大学史料を保存し公開する機関。日本では自治体の場合と同様、大学でも大学史編纂は盛んに行われているが、大学の文書館(アーカイブズ)は少ない。大学史料館・大学資料室と呼ばれることが多い。<sup>(2)</sup>

この定義によれば、創価教育研究センター（以下センターという）は大学の運営にとって非現用の文書記録を大学の足跡を示す記録史料として保存し、公開する機関であり、収集された史料をもとに大学史編纂に利用するのみならず、学内外の接点として史料を幅広く有効利用することにより、研究教育活動に還元される組織といえる。また展示活動などを通して学生に大学理念（建学の精神）を伝えるという大学アーカイブズ機能の役割をも担っていると言える。

## 2. 創価大学の沿革と創価教育研究センターの開設と経緯

大学の「創立の志」「建学の精神」は大学の歴史の中に脈々と流れ、育まれている。特に「創価教育」の理念は昭和5年、創価大学の創始者牧口常三郎先生と戸田城聖先生による「創価教育学会」創立から生まれ、現在の創価大学の「建学の精神」として結晶している。「人間教育の最高学府」を標榜して設立された創価大学を知るために、大学の沿革略史を掲げる。また、創価大学の理念、「創価教育」の思想と実践の研究、大学の歴史を研究し、大学の発展に資するために開設された、創価教育研究センターの開設に至る経緯を述べてみたい。

2—1 創価大学の沿革略史<sup>3</sup>

- 1930年（昭和5年）11月 牧口常三郎先生<sup>(4)</sup>により「創価教育学会」創立 『創価教育学体系 第1巻』（著者・牧口常三郎発行人・戸田城外<sup>(5)</sup>（後戸田城聖と改名）発刊
- 1944年（昭和19年）11月 牧口常三郎先生逝去
- 1953年（昭和28年） 戸田城聖先生『価値論』（著者・牧口常三郎）を復刊
- 1958年（昭和33年）4月 戸田城聖先生逝去
- 1964年（昭和39年）6月 創立者池田大作先生<sup>(6)</sup>より創価大学設立構想発表
- 1969年（昭和44年）4月 起工式
- 5月 創立者池田大作先生が創価大学の「建学の精神」を提唱
- 1971年（昭和46年）2月 竣工式
- 4月 開学（経済学部・法学部・文学部）創立者からブロンズ像寄贈
- 4月 第1回入学式
- 1975年（昭和50年）3月 第1回卒業式 613人の第1期生が卒業
- 4月 大学院博士前期課程（経済学研究科・法学研究科・文学研究科）開設
- 1976年（昭和51年）4月 経営学部・教育学部開設 通信教育部（経済学部・法学部）・別科（日本語研修課程）開設
- 1977年（昭和52年）4月 大学院博士後期課程（経済学研究科・法学研究科・文学研究科）開設
- 1982年（昭和57年）4月 通信教育部（教育学部）開設
- 1985年（昭和60年）4月 創価女子短期大学開設
- 7月 ヨーロッパ語学研修センター開所
- 1986年（昭和61年）4月 大学院博士前期課程文学研究科教育学専攻開設
- 1987年（昭和62年）2月 創価大学ロサンゼルス分校開設
- 1988年（昭和63年）4月 文学部人文学科開設
- 1989年（平成元年）4月 大学院博士後期課程文学研究科教育学専攻開設
- 1990年（平成2年）4月 文学部日本語日本文学科・文学部外国語学科（中国専攻・ロシア語専攻）開設
- 1991年（平成3年）3月 池田記念講堂落成

- 4月 工学部（情報システム学科・生物工学科）開設  
1992年（平成4年）4月 大学院博士前期課程文学研究科人文学専攻開設  
1994年（平成6年）4月 大学院博士後期課程文学研究科人文学専攻開設  
1995年（平成7年）4月 大学院博士前期課程工学研究科情報システム学専攻・生物工学専攻開設  
1997年（平成9年）4月 大学院博士後期課程工学研究科情報システム学専攻・生物工学専攻開設  
1999年（平成11年）5月 本部棟竣工  
2001年（平成13年）5月 アメリカ創価大学開学

## 2-2 創価教育研究センターの開設と経緯

創価教育研究センターは2000（平成12）年11月16日、創価大学創立30周年の記念事業として大学附置施設として開設された。センター開設の経緯については、1994（平成6）年10月14日、創立者池田大作先生からご提案があり、学術・教育機関の新設などの未来構想が検討され、その構想の中で創価教育研究センター設立の構想も示されたのである。そして、創価大学の“建学の理念”の実現を目指し、創価教育の父・牧口常三郎先生のエデュケーションの研究をはじめ、人間・人権の視点からの提言を行う<sup>(7)</sup>との「創価教育研究所」（後に「創価教育研究センター」と名称を変更）構想により開設準備の計画が開始されたのである。

その後、1996（平成8）年5月15日「創価教育資料室・資料収集委員会」が発足（後に「創価教育資料収集委員会」と名称を変更）し、各種資料の収集・保管に関して

- ①創立者の教育構想・指導についての取材・記録
- ②創立者の日本語及び各国語に翻訳された出版物の収集・保管
- ③牧口常三郎先生の「創価教育」学説、戸田城聖先生のエデュケーションに関する資料の収集・保管について、の3項目が検討された。

### 当時の「創価教育資料収集委員会」の活動内容

- ①創立者及び牧口先生・戸田先生に関する出版物資料を収集し、学内及び国内外の研究者が閲覧できる環境を整える。
- ②本部棟に開設する展示室（案：創立者コーナー・大学紹介）の資料収集や展示計画を立案する。
- ③大学史編纂の為に資料収集（写真・品物・印刷物・新聞記事）及び大学・学園の30数年間にわたる発展の歴史と創立者の創価教育の理念を研究する。

④「創価教育研究所」のコンセプトなど設立に向け方向性を検討する。  
などの点が挙げられる。これらの委員会活動を踏まえて、現在の「創価教育研究センター」が開設の運びとなったのである。

設置の目的は、創価大学創価教育研究センター規程の中で「本学の歴史並びに創立者池田大作先生及びその淵源となる牧口常三郎先生、戸田城聖先生の創価教育の思想と実践の研究を行い、本学の発展に資すること」と謳われている。<sup>(8)</sup>

また事業内容として

- ①資料の調査収集、整理、保存及び管理
- ②資料の公開、展示及びレファレンスサービス
- ③資料の研究及びその成果の発表
- ④研究成果の教育活動への還元
- ⑤講演会、公開講座、シンポジウム、セミナーの開催などが挙げられる。<sup>(9)</sup>

そして、設置の目的にもあるように、創立者池田大作先生、牧口常三郎先生、戸田城聖先生の様々な史料を収集すると共に、「人間教育の最高学府」としての創価大学の歴史を残すための記録史料の収集を行っている。

現在、センターは『全国大学史資料協議会』に参加し、大学史に関する情報交換及び史料の収集・保存・利用に関する研究を行っている。創立100周年を超える大学が『全国大学史資料協議会』に多数参加し、大学史に関する情報が寄せられている。センターにとって質的向上、交流を図る上で貴重な場となっている。

史料収集はセンター関係者のみならず、在学生、卒業生、教職員、研究者など学内外のネットワークと協力があって実現するものである。

以上述べてきた、センター設置の意義を踏まえ、より良いセンターを構築していくことが、アーキビストとしての、我々に課せられた重要な役割と言えよう。

### 3. 創価教育研究センターにおける史料の種類

大学史資料の基本的な性格は、大学の歴史を記録した史料であるという点で、文書館が所蔵する行政文書等と同様に大学史資料は歴史史料の範疇に入る。現在のところ大学史資料の内容は以下のように提示されるのが一般的である。

史料の種類<sup>(10)</sup>

- (1) 大学運営の歴史を示す公的文書、簿冊、事務記録、その他の文書。
- (2) 大学内諸機関の議事録、意見書、答申、報告書等。
- (3) 大学の刊行する年報、要覧、雑誌、新聞、広報紙誌等。

- (4) 大学卒業生の卒業証書、アルバム、講義ノート、伝記、書簡。
- (5) 学長、学部長、教授、職員等の私蔵する文書類のうち、特に大学に関するもの。
- (6) 大学設立者、寄附者、卒業生等関係者の文書。
- (7) 大学の歴史を示す記章、門標、記念品、トロフィー、旗、印璽等の物品。
- (8) 大学に関する写真、テープ、ビデオテープ、フィルム等。
- (9) 大学史に関する諸刊行文献。
- (10) 学問史的な意味を持つ実験器具、研究室製作品、報告書等。

しかし、現状では10項目にわたる多様な史料の種類全てが収集されている訳ではない。特に大学運営の歴史を示す「許認可関係史料」は重要な基礎史料として、学内コンセンサスを得て収集されなければならない。私立大学では校友会などの関係史料なども挙げられるが、学内文書など各部局で作成される文書について収集すべき文書の一覧表を作成し、収集作業を具体化することが今後の課題である。

#### 4. 創価教育研究センターの大学アーカイブズ機能

大学アーカイブズ機能を論ずる前に、「記録史料」を扱うセンターとして記録史料学とは何かについて、安藤正人教授の記録史料学の講義から学んだ点を述べてみたい。

記録史料学とは、歴史研究をはじめとする人間の様々な創造的文化活動を素材として活かすため、必要な知識と技術の体系化を目指す学問分野であり、「記録史料認識論」と「記録史料管理論」に分けられる。

「記録史料認識論」において

- ①多角的・立体的な史料理解の方法を確立する必要がある。
- ②記録史料「群」の構造論的研究を中心的な課題にすえ、その方法論を確立する必要がある。
- ③記録史料の科学的認識のためには、個々の史料体の理解や記録史料群の内部構造の解明だけではいまだ不十分であり、周辺に存在する他の記録史料や非記録史料との関係、あるいは当該史料が伝存するにいたった状況や環境（保存状態、保存空間、管理制度、その他）などを歴史的、実体的に明らかにする必要がある。

「記録史料管理論」史料管理の目的は、史料を社会的・文化的資源として広く、かつ永続的に利用できるよう、適切な保存・公開システムを構築し、これを維持することである。記録史料について言えば、この目的を達成する作業プロセスは一般に

①調査収集、②整理記述、③保存管理、④利用提供、という四つの段階あるいは局面に分かれると考えられる。これらの作業プロセス全体に関わる点として⑤管理体制（史料保存機関や制度）がある。<sup>(11)</sup>

以下、「記録史料管理論」の立場を踏まえ、大学アーカイブズの機能について述べてみたい。

### （１）史料の収集と整理

史料の収集は容易な作業ではない。大学公文書を収集する場合、収集のためには所在状況を把握しなければならない。学内において文書を統一的に収集・保存してきた部署があれば円滑に進めることが可能であるが、資料が散逸して、管理が不適切な場合がある。各個所に分散している法人・教学に関する文書を包括的、系統的に収集整理するためには、これを可能とするシステムを確立する必要がある。一定期間を過ぎた各個所の非現用文書をセンターへ移管する手続きが必要となる。

しかしながら、「非現用大学公文書のセンター移管手続き規程」の速やかな策定が要請されているのが現状である。まず学内の諸部局や関係者からの情報収集が必要となろう。

また、非現用文書を一元管理する場合、文書の移管<sup>(12)</sup>・評価・選別<sup>(13)</sup>・廃棄の責任もセンターが負うことになり、収納スペースとの関係で、どのような基準を設定するかが、問題点として挙げられる。

史料収集について、本学の学生自治会が「創価大学学生資料館」<sup>(14)</sup>を開設し、創価大学生の歴史に関する資料（大学行事、クラブ、寮、自治会）、建学の理念に関する資料（創立者、創価大学）、有意義な学生生活を送るために役立つ資料（大学論、知的啓発）などを収集することにより、“学生参加”を大学の理念とする本学にとって、「資料館」開設は有意義なものと言えよう。学生の立場から、学生に関する史料の収集を図ることは学生が大学に主体的に係わることであり、積極的にセンターがこれを支援し、連携を深めていくことにより、大学史料の充実を図りたい。

また学外についても同様に情報を収集・交換していくことが求められており、学外の広い範囲の研究者の協力を得ながら、史料所在調査に時間と労力をかけることが求められている。一例として、本学の姉妹校である「創価学園」に「創価教育研究所」<sup>(15)</sup>が開設され、教育現場に根差した活動を展開している。このような機関と連携を取り、センター「創価教育」に関する史料収集を行っている。

この他、センターでは学術調査活動として、牧口常三郎先生の足跡を辿り、事跡の調査



(フィールドワーク)と聞き書き(オーラル・ヒストリー)を実施している。自らの足で時間と労力をかけることにより新史料の発見があった。学外のネットワークによる調査の広がりを実感する。

収集史料の整理の目的として、「誰もが自由に」「科学的に」「永続的に」利用できることが挙げられる。史料群について、この三原則が実現できるような保存管理体制を構築することが目的である。このような条件を整えるためにも、物理的な保存処置を講じ、目録に基づいて管理し、史料群の出所や構成を明らかにし、それに基く科学的な検索手段を作成することが必要である。

特定の目的や機能を達成するための機関が組織化された行為として、その過程で作成、授受、蓄積される記録史料にも一連の流れ、一定の秩序が生まれることになる。またそれぞれの記録史料はそれを生んだ組織と機能を反映した体系的秩序を内包している。これらの記録史料の体系的秩序を「文書群の階層構造」(hierarchy of records)と呼んでいる。こうした「文書群の階層構造」を内包していることが整理対象としている記録史料の基本的な特徴である。

史料整理にあたって、「出所原則」と「原秩序尊重の原則」という二つの原則が基本原則として挙げられる。「出所原則」(principle of provenance)とは、ひとつの出所を持つ文書群は整理にあたって他の出所を持つ文書群と混合されてはならないという原則である。これは部局が異なる文書は混同してはならないということである。「原秩序尊重の原則」(principle of respect for original order)とは、出所を同じくする文書群の中で個々の文書がもともと与えられている秩序がそれを生んだ機関・団体・家・個人の活動の体系を反映しているものである場合には、その原秩序を尊重して残さなければならないという原則である。

近年、史料整理にコンピュータを利用している大学が多いが、いずれにしても利用が必要とする史料が検索システムで速やかに利用できるシステムが必要である。あくまでも上記の原則を踏まえ、センターでの整理については「史料管理学研修会」で学んだ内容をもとに、史料整理計画の立案、検索手段作成の基本手順、文書群の構造分析、多角的検索手段など、詳細は今後の検討課題としている。

## (2) 史料の保存と利用

近年、史料保存問題を重視する傾向がある。それは、歴史学・教育史学による大学史研究の深まりとともに、「公文書館法」制定に見られる史料保存運動の展開や、更には大学の社会的地位などの客観的条件に強く影響されたものである点と言うまでもない。

そのような客観情勢のもとで史料の保存を考える時に、記録史料がどのようにセンターに移管されるかという問題もあるが、文書の作成から保管、廃棄まで現場の文書管理の実態を全体的に分析し、記録のライフサイクルからみた総合的記録管理システムを構築する視点で、センターの史料保存問題を今後検討していきたい。

### (3) 研究成果の公開

様々な研究活動の結果、研究成果を発表する機能として、センターでは仮称「創価教育研究センター紀要」「創価教育研究センターニューズレター」等の刊行及びホームページによる情報発信を考えている。

また(4)「展示活動」でも述べるが、資料に基いた展示を行うことは、社会に対して研究成果を公表し、大学の理念を公にする機会として有効である。

### (4) 展示活動

センターで収集した資料は展示活動のなかで一部公開がされている。未整理の資料が多々あるため、しばらく展示活動をと通しての公開のみとなっている。

具体的な展示活動の施設として、開学30周年を記念して建設された「創価大学本部棟」の5階6階が展示スペースとなっている。

展示の内容は、創価大学の「建学の精神」を表す①人間教育の最高学府たれ、②新しき大文化建設の揺籃たれ、③人類の平和を守るフォートレスたれ、の三指針を具現化したもので、特に映像・音声・写真・展示品などを通して様々な角度から大学の理念が理解できる展示を目指している。<sup>(16)</sup>

展示の全体のテーマと各展示室のテーマを挙げると、創立30周年記念展示は「人間教育の最高学府—淵源から未来へ」をテーマに開催(1999年7月から本年11月)された。

第1展示室では「創価大学の淵源と創立者」をテーマに牧口常三郎筆による「創価大学」の扁額と創立者・池田大作先生揮毫の「建学の精神」が展示されている。

第1ギャラリーでは「大学の発展の歴史」をテーマに大学年表と写真・記念品などで構成されている。

第2展示室では「創立者と学生の輝きの日々」として創立者が学生とともに歩んだ姿を写真と色紙などで紹介されている。

第3展示室では「創立者の平和行動と創価大学の国際交流」をテーマに創立者の海外の大学・学術機関での講演とともに世界の識者から創価大学に贈られた友誼の品が展示されている。

第2ギャラリーでは「世界の識者との対談集」をテーマに写真パネルと各国語に訳された書籍が展示されている。

第4展示室では「世界の哲人たちとの共鳴」をテーマに、ルソーやユゴーの草稿など数々の大学重宝・貴重図書が展示されている。

展示活動は大学の「建学の理念」を学内外に発信する手段としても、博物館実習などの教育活動の場としても有効である。また、展示を通じて多くの関係者から史料の寄贈、寄託を受けることもあり、その結果として史料の充実が図られている側面もある。

展示活動は、本来「大学ミュージアム」としての役割であり、図書館・博物館・文書館の間における施設面と専門職としての差別化が図られるべきであろう。しかし本学の規模では組織の細分化はデメリットが多い。むしろセンターとしてはこのようなモノ資料を活用して、情報発信としての「博物館的機能」を複合させていくことが必要不可欠ではないだろうか。本学の「建学の理念」を具現化する常設展示とともに、企画展示としてセンター主催の講演会の企画とリンクして有機的な展示会を今後とも企画していきたい。

#### (5) 講演会の開催

センターでは開設以来、学内外の研究者・卒業生・教員・関係者を招き、講演会を主催してきた。講演会を開催する大きなメリットは学内外に創価大学の理念をアピールすることにより大学のアイデンティティが確認されることでもあり、学生にとっても大学の精神を理解するうえで貴重な情報発信の場となっている。

講演会の主な主題として

- ①牧口常三郎先生の「創価教育」。
- ②戸田城聖先生と「創価教育」。
- ③草創の創価大学を当時の学生、教員の立場から語る。
- ④創立者池田大作先生と学生について。

などが挙げられる。

参考までに、センターが主催した講演会について列記する。

- ①「創立者と学生－（草創の大学を語る1）『創価教育学体系』発刊70周年記念講演会」 篠原誠（本学顧問）2000年11月18日
- ②「牧口常三郎研究の現在－『創価教育学体系』発刊70周年記念講演会」 斉藤正二（本学教授）2000年11月18日
- ③「学生こそ大学建設の主役－（草創の大学を語る2）」 高村忠成（本学副学長補）2001年4月24日

- ④「戸田城聖の生きた時代―戦時ジャーナリズム研究の立場から」高崎隆治（ジャーナリスト）2001年5月9日
- ⑤「牧口常三郎の世界と創価教育学―今、創価教育学は何を訴えるか」熊谷一乗（文学研究科長・本学教授）2001年6月6日
- ⑥「日本地理学史上の『人生地理学』―『人生地理学』発刊98周年記念講演会」岡田俊裕（高知大学教授）2001年10月15日
- ⑦「草創の滝山寮と大学を語る―（草創の大学を語る3）創価教育研究センター開設1周年記念講演会」田代康則（本学副理事長）2001年11月15日
- ⑧「周総理と池田先生―会見後の知られざる秘話」三津木俊幸（創価学会副会長）2001年12月5日

#### （6）年史編纂事業

年史編纂事業は、文書収集と聞き取り調査が中心となっている。前述した許認可関係の公文書を始めとして、学内文書や刊行物など、大学組織の機能や活動を知る上で欠くことのできない歴史史料である。史料収集にあたり、史料批判の必要性が認識されてきたが、これは聞き取り調査にも言えることで、必ず内容を検証する必要がある。

「創価大学30周年記念写真史」を昨年刊行したが、近年における写真集や図説の刊行は大学史研究にとって「写真」などの視聴覚資料の重要性を改めて認識させるものとなった。

創価大学大学史編纂事業(案)に関して、編纂事業の趣旨、本学の取り組み、本学における大学史関連の出版状況、他大学における大学史関連の出版状況について以下述べてみたい。

##### ○編纂事業の趣旨

- ①創立者の建学の精神と人間教育の歴史を残すことを第一義とする。
- ②大学としてのアイデンティティを確かめ、それを社会に問い広げてゆく事業である。
- ③大学の創設から現在にいたるまでの歴史的経験と伝統・変革の歩みを綴る本格的な報告書である。
- ④大学の使命たる教育・研究の実績を世に問う業績書、著作である。

##### ○本学の取り組み

- ①大学史纂にあたって、基本コンセプト、史料保存、収集などを検討する大学史編纂委員会の設置。
- ②史料収集委員会の設置。
- ③収集史料の整理（創価教育研究センターで実施）。

④大学記録史料の保存規程と廃棄基準の策定。

⑤納本制度（会議録、写真類、その他）等。

○創価大学における大学史関連の出版状況

①大学の記念文集、創立者の語らいが学生中心に刊行。

②大学で出版されている大学史関連の刊行物は10年史、15年史、30年史などの写真集が刊行。

③本格的な大学誌として、学生自治会から『創価大学30年誌〔学生版〕』が刊行。

この他、創価大学で刊行された「大学史」関連出版一覧を別紙（研修レポートの最終ページ）として掲載する。

○他大学における大学史関連の出版状況について、「大学史」編纂・資料保存等に関するアンケート結果（1993.5.12）（東日本大学史連絡協議会、後に全国大学史資料協議会）によると

①主な私立大学では建学の精神・大学の歴史を記録する「大学史」を編纂することが大学の評価につながっている。

②年史の刊行は40校。

③図録・写真集の刊行は23校を数える。

④年史は50年史、100年史が多く刊行されている。

⑤図録・写真集の発行も100年史が多い。

⑥図録・写真集に年史を加味した傾向が見受けられる。

⑦CD-ROM等の電子媒体で記録する大学もある。

アンケート実施から8年以上過ぎているため、年史を刊行する校数や発行年のデータについては、全国大学史資料協議会で再度アンケートが実施されることが要望される。

最近では創立100周年、120周年など迎える実践女子学園、中央大学、神戸女学院大学などが年史を刊行するなど、出版活動が活発に展開されている。

## 5. 今後の課題と展望

### ①アーキビストの養成

アーキビスト (archivist) は記録史料の管理に関する専門職である。記録史料の科学的で永続的な管理、言い換えれば、誰もが自由に、いつまでも、かつ正確な認識のもとに記録史料を利用できるようにするためには、専門職としてのアーキビストの存在が不可欠である。<sup>(17)</sup>「史料管理学研修会」を受講し、史料管理学の基本的な理論と知識を得ることができた。「記録史料」をどう具体的に実務に反映することができるかが、今後の課題となる

う。

また、モノとしての「博物資料」、アーカイブズとしての「記録史料」、図書としての「図書資料」は概念的にも扱い方も異なっている。学問体系としては博物館学、記録史料学、図書館学に区別され、それぞれ独自の方法で取り扱う必要がある。

しかし、センターのように「博物資料」「記録史料」「図書資料」と様々な資料を収集・管理する機能を一つの「館」で行うことが要求される機構では、それぞれ独自の体系を持った世界であることを認識し、収集・管理をお行うことが求められている。そして、そこに専門職としてのアーキビストの存在が不可欠である。

## ② 規程類の作成・整備

開設間もないセンターではあるが、規程類の作成・整備をはじめとして、史料の収集・管理システム、収集された史料の整理などについても、試案の段階から実施の段階に入っている。

「文書保存規程」の改正や整備を求める動向は、一言でいえば、資料保存の理念を規程上に反映させ、具体化するための活動である、学内文書の収集作業は、大学という組織全体にかかわる文書管理の一環としてなされなければ、大きな成果を望むことはできないだろう。特に、近年「業務の標準化を図る」という観点から文書管理に関する諸規程を制定・整備する大学が多くなっており、その意味でも、史料保存問題を年頭においた諸規程の体系化を強調する必要がある。そして、その際に注意すべき点は、史料の保存を判断する主体を明確にする点にある。<sup>(18)</sup>

大学では「文書取扱規程」<sup>(19)</sup>により運用されているが、「第18条文書の保存期間」の「文書保存に関する規程」などセンターへの文書移管等についても試案を作成している。史料群を体系的に整理するためには、学内納本制度・受付体制など大学内発行の文書や廃棄文書等を積極的に収集するべきである。そのために、早期に規程類を整備し、学内コンセンサスを得るとともに、規程改正についても速やかな対応をする必要がある。具体的には、保管年限を超えた学内文書の移管がセンターへ継続して行われるよう、「創価教育研究センター移管規程」などの諸規程の整備と各部局の規程との整合性を持った文書移管ルートの確立が求められる。

また、文書移管に伴う、中間庫機能を備えた保存スペースの確保と一定期間保管した学内文書の評価選別を実施すべきである。文書移管の時期などを学内年間スケジュールに組み込み、文書管理を一連の業務システムとして機能させることなどを規程に反映させ具体化していきたい。

この問題に関連して、各部課に存在する学内文書・刊行物の再調査を実施し、文書の所在を明らかにすること、文書の体系的保存と継続性が失われないようにするために、規程の中で業務システムに文書管理を整備することが肝要である。

### ③ 大学の「自己点検・評価」とセンターのアーカイブズ機能とのかかわり

「自己点検・評価」は大学の研究・教育の現状を正しく認識し、そこに内在する課題を明らかにして改革していくためのものである。

大学設置基準が一部改正になり、各大学の自己点検・評価が努力義務から義務へと変更になり、その結果の公表もまた第三者による評価も義務化されている。大学の「アカウンタビリティ」への倫理的社会的要求の高まりに対して対応が迫られている。「大学の沿革史編纂という活動自体、最も時間的スパンの長い自己点検・評価の作業である。」<sup>(20)</sup>

京都大学大学文書館の設置提案の中に次のように記されている。

「本学を含めた従来の日本の大学が、史料にもとづき、自らの存在理由についてどれだけ考えてきたかとなると、実は甚だ心もとないのではないだろうか。大学組織の巨大化、学問分野の細分化によって、大学のあり方を歴史的、総合的に考える場が存在していないのではないかという疑問を感じざるをえない。このような場として期待されているのが大学文書館であると考えられる。収集した史料を基本に、自らの大学の歴史や大学のあり方についての研究・教育のセンターとして、学内外にさまざまなメッセージを発信することによって、本学にとって文書館は継続的、恒常的な自己点検の場となると同時に、所蔵史料を公開することによって、第三者にも応じられる、開かれた場となるであろう。」

このような大学アーカイブズ論はまさに当センターのアーカイブズ機能論を端的に表しているものと言える。

### ④ 教育活動としての自校史への取り組み

「創立者の思想を創価大学でこそ学びたい」という学生の要望に応え、平成6年度学生大会での決議を経て開講された。共通科目として「21世紀文明論」の授業が行われている。

「創立者の語らい」を基調としながら、開学当時に創立者が語られた「新しい人間復興の哲学」を探求し、毎回、講師として、本学の教員のみならず、本学の創立の精神に賛同する国内外の識者を招き、講義が行われている。「学生にとって『いかに自己を作っていくか』という自身の課題と『いかに平和を構築するのか』という大きな命題を掲げ、創立

者と同時代に生きる学生として後輩の希望となる学風を学生自身の手で作って生きたい」<sup>(21)</sup>との講義目標が具体化されている。

まさに、大学の建学の理念と精神を学生とともに学ぶ機会として、自校史教育の一環として継続して取り組み、教・職・学が一体となって大学のアイデンティティを確かなものとする場ではないだろうか。

#### ⑤ デジタル・アーカイブの対応

史料の保存と利用を考える上で、史料のデジタル化を推進することが今後の課題とされている。一つの方向性として、デュアルシーブ<sup>(22)</sup>の側面がある。大学アーカイブズの持つ情報を高精細・高密度・多面的にデジタル化することが可能になり、オリジナルの史料を閲覧しなくてもデジタル情報だけで間に合うことも多くなった。しかし、オリジナル史料の持つ情報を全てデジタル化することは出来ない現状がある。

原史料のデジタル情報への転換と活用でなく、保存・活用のための選択肢に原史料（アナログ資料）とデジタルの情報を両立させ、それぞれの史料に最適な形態で保存し、活用し、次世代へ継承していくべきである。アナログ史料には、一度に多数の利用者が使用できず、使用するほど傷んでしまうといった、アクセスや保存の問題がある。アナログ原本は保存し、デジタル複製を活用することで、原本は傷めず情報へのアクセスが保証され、多彩な活用が可能となる。

アナログ史料とデジタル情報が補完し合うことで、新しいアーカイブズ像が見えてくる。今後の課題として検討していきたい。

#### 6. 終わりに

研修レポートの終わりにあたり、平成13年度国文学研究資料館史料館主催史料管理学研修会受講申込書に問題意識が明確になっているので再度掲載することにする。

開学30周年を迎えて、大学の設置・創立等の歴史的経緯を証明する文書・記録を保存・収集するため、昨年、大学アーカイブズ機能を持った『創価教育研究センター』が設置された。センターの開設準備と30周年記念写真誌編纂事業に従事し、図書館司書とは異なる専門性の必要性を痛感した。また大学に関する文書・物品の保全・復元・展示等について、学芸員としての経験を踏まえ、今後アーキビストとして、記録史料の収集・保存・利用について、最新の専門的知識の吸収及び技術の向上を図ることを目標とする。

センター開設当初からセンターをどう構築していくのか、暗中模索の日々であった。しかしながら史料管理学研修会を終了して、種々の課題について、解決の糸口が見つかった



ように思う。

研修で学んだ点を出発点として、大学アーカイブズ機能を持った「創価教育研究センター」を構築することこそ「大学改革」を担っている、との意識で、業務に取り組んでいきたい。

この研修レポートを執筆するにあたり、テーマへの取り組みが総論的な問題提起に終わったことを反省している。特に「史料の保存と利用」「研究成果の公開」については、論議を加える必要がある。このほかにも個々の問題については今後の検討課題としたい。

## 7. 謝 辞

史料管理学研修会の受講にあたり、授業、見学などでお世話になった国文学研究資料館史料館の先生、職員の皆様のおかげで拙いながらもレポートとしてまとめることができた。特に安藤正人教授には多くの示唆に富んだお話をお伺いし、謹んで謝意を表したいと思う。

## 注 釈

- (1) 安藤正人「アーカイブズの科学をめざして」『企業アーカイブへの提言』No.3 pp.1-17
- (2) 文書館用語集 p. 77
- (3) 創価大学資料編 2001年度版 創価大学30年誌（学生編）を参考に作成
- (4) 牧口常三郎は、1871(明治4)年6月6日、新潟県柏崎に生まれる。北海道尋常師範学校卒業後、東京・富士見尋常小学校を始めとして、6校の小学校校長を歴任。1903(明治36)年『人生地理学』、1928(昭和3)年、三谷素啓に出会い、日蓮大聖人の仏法に帰依。1930(昭和5)年『創価教育学体系』全4巻を発行。創価教育学会を創立。第2次世界大戦中、宗教・思想の統制を図る軍部権力に検挙、投獄されながらも、信教の自由という基本的人権の尊重を訴え続けた。
- (5) 戸田城聖は、1900(明治33)年2月11日、石川県に生まれ、北海道で育つ。20歳で上京し、牧口常三郎に師事する。23歳で私塾「時習学館」を主宰。1928(昭和3)年牧口と共に日蓮大聖人の仏法に帰依。第2次世界大戦中、宗教・思想の統制を図る軍部権力に検挙されたが、戦後は民衆救済運動に身を投じた。1951(昭和26)年創価学会会長に就任。牧口の遺言である「創価大学」設立を池田大作に託した。
- (6) 池田大作は、1928(昭和3)年1月2日、東京都に生まれる。富士短期大学卒業。創価学会名誉会長、創価学会インターナショナル(SGI)会長。創価大学、創価学園、民主音楽協会、東京富士美術館、東洋哲学研究所などを創立。平和・文化・教育の推進に尽力する。国連平和賞、桂冠詩人の称号他多数の称号を受賞。モスクワ大学、北京大学、グラスゴー大学など海外の諸大学、学術機関から多数の名誉称号を受賞する。トインビー対談『二十一世紀の対話』ほか著作多数。
- (7) 聖教新聞1994(平成6)年10月15日付1面
- (8) 創価大学規則規程集 創価大学創価教育研究センター規程 第2条(目的) p.2322

- (9) 同 第3条(事業) p.2322
- (10) 寺崎昌男『大学史をつくる』東信堂 1999 pp. 202-203
- (11) 安藤正人『記録史料学と現代』吉川弘文館 1998 pp. 23-25
- (12) 移管 (disposal) の用語定義について、「記録史料の評価・選別」で神奈川県立公文書館・石原一則氏の講義で紹介があった。①「法令または管理上の手続きによって定められた保存期間が満了し、評価の後に非現用記録に対して取られる行為。廃棄と同義語の場合もよく見られる」(ICA, 1988) ②「法律・規則または管理上の処理により、定められた保存期間を過ぎた非現用記録に対して評価に基いてとられる処置。文書館への移送や廃棄も含む」(ICA, 1997) ③「文書館の用語で、過去のものとなった記録その他の文書を、評価したのちとられる措置。一時的ないし永久的保管のため他の保存機関へ移すこと。マイクロフィルムによる複製、破棄などが含まれる」(ALA)
- (13) 評価・選別 (appraisal) について(12)と同様に講義で紹介があった。①「記録史料の価値に基いて記録の最終的な移管(disposal)を決定する公文書館の基本的な機能」(ICA, 1988) ②「現用業務、法務上、財務上の利用、証拠価値ならびに情報価値、その資料の整理と現況および他の記録との関係に基いて、価値を決定し、記録を最終的に処理する記録管理および史料管理の基本機能」(ICA, 1997) ③「記録の価値及び処理方法を決定する過程。記録の現在の管理上、会計上、あるいは法的な使用状況、情報的・研究価値、その整理状況、そして他の記録との関係に照らして行う」(ALA)
- (14) 2001(平成13年)5月の定期学生大会で決議された「平成13年度学生自治会年間活動方針」の中で設立が謳われ、同年9月に開設されたもの
- (15) 1997(平成9)年4月に、学園創立30周年を記念して、東京創価学園に開設され、創価学園(東京、関西校)の小中高と札幌創価幼稚園を結び創価教育の理念と実践を集約しながら21世紀の「教育指標」を示すことを目標としている。
- (16) Soka University, *Special Exhibition in Celebration of Soka University's 30th Anniversary*, 2000
- (17) 安藤正人『記録史料学と現代』吉川弘文館 1998 p.40
- (18) 澤木武美他「大学史編纂と資料の保存・現状と課題」『記録と資料』第3号 1992 pp.35-43
- (19) 創価大学規則規程集 学校法人創価大学文書取扱規程 pp.640-653
- (20) 寺崎昌男「特別寄稿 私の大学アーカイブズ論」『紫紺の歷程』第5号 2001 pp.26-38
- (21) 創価大学講義要項 [平成13年度] p.69
- (22) DNP(大日本印刷)が提唱する企業資料活用システムの名称。「デュアル＝二重の」「アルシーブ＝資料庫」の造語で、アナログの原資料を保存するとともに、デジタル化して活用するためのデータベース・システム。

#### 参考文献

- (1) アーカイブズ・インフォメーション研究会編『記録史料記述の国際標準』北海道大学図書刊行会 2001
- (2) 安澤秀一『史料館・文書館への道—記録・文書をどう残すか—』吉川弘文館 1985
- (3) 安藤正人・青山英幸編『記録史料と管理と文書館』北海道大学図書刊行会 1996

- (4) 大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』吉川弘文館 1986
- (5) 国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』岩波書店 1988
- (6) 全国大学史資料協議会『大学アーカイヴズ』No.1-25
- (7) 津田秀夫『史料保存と歴史学』三省堂 1992
- (8) Kenneth E. Smith, *The archives of the University of Sydney: Past, present, and future.* 1997

創価大学「大学史」関連出版一覧

	No.	発行年	タイトル	編著者	発行者	備考
大 学 発 行 ・ 年 史	1	1970	人間教育の府－創価大学	創価大学	創価大学	377.2/N76
	2	1974	創価大学	創価大学	創価大学	377.28/So81
	3	1974	創価大学写真集	岡安博司	創価大学出版会	377.28/So32
	4	1974	ガイド・ブック創価大学	岡安博司	創価大学出版会	
	5	1974	人間教育の府		創価大学 創価学園	
	6	1975	創価大学写真集	岡安博司	創価大学出版会	
	7	1978	創価大学－人間教育10年の歩み	岡安博司	創価大学出版会	377.28/So32
	8	1980	創価大学教育学部第一期生-第一回卒業記念アルバム	創価大学教育学部	創価大学教育学部	377.9/So32
	9	1985	創価大学－人間教育15年の歩み	岡安博司	創価大学出版会	189.743/So81
	10	1985	創価教育-SOKA EDUCATION	創価大学	創価大学	189/So32
	11	1988	Soka Schools:Centers of Value-creating Education－創価教育の府		創価大学	
	12	1989	SOKA EDUCATION－創価教育		創価大学 創価学園	
	13	1991	FRIENDSHIP AND WORLD PEACE		創価大学	
	14	1994	青春の光彩－創価女子短期大学開学10周年記念		創価女子短期大学	
	15	1995	光友の誓－通信教育部開設20周年記念出版	記念編纂委員会	通信教育部	
	16	1999	光友の誓－創価大学通信教育部開設25周年記念出版	記念編纂委員会	通信教育部	189.743/So81
	17	2000	滝山城址に立ちて－創価教育同窓2000年総会記念	池田大作	創価大学同友会	
	18	2000	創価大学創立30周年記念写真史	田代康則	編纂委員会	189.743/So32
	19	2001	写真集 創価教育		創価大学 創価学園	
記 念 論 集	1	1974	創価大学開学記念論文集	編集委員会	刊行会	041/So32
	2	1975	創立5周年記念論文集	編集委員会	創価大学出版会	377.28/So32
	3	1978	創立10周年記念論文集	編集委員会	創価大学出版会	041/So32
	4	1985	創立15周年記念論文集	編集委員会	創価大学出版会	041/So32
	5	1989	創立20周年記念論文集	編集委員会	創価大学出版会	041/So32
	6	1995	創立25周年記念論文集	編集委員会	創価大学出版会	041/So32
学 生 発 行	1	1971	青春のシュプール－創価大学建設の歩み	青春のシュプール刊行委員会	第2回創大発行委員会	377.9/Se19
	2	1974	草創－一期生記念文集	金沢敏雄	出版委員会	377.9/So65
	3	1974	草創－二期生記念文集	藤原和臣	出版委員会	377.9/So65
	4	1974	21世紀の潮流(四十九年度版)		新入生歓迎委員会	
	5	1975	草創－三期生記念文集	猿渡稲夷	出版委員会	377.9/So95
	6	1975	二十一世紀の潮流(五十年年度版)	新入生歓迎委員会	学生自治会	
	7	1976	創造－四期生記念文集	出版委員会	出版委員会	377.9/So66
	8	1976	二十一世紀の潮流(五十一年度版)	新入生歓迎委員会	学生自治会	
	9	1977	丈夫－五期生記念文集	出版委員会	出版委員会	377.9/Ma68
	10	1977	二十一世紀の潮流(五十二年年度版)	編集委員会	学生自治会	
	11	1978	TOWARD THE 21ST CENTURY		STUDENT INTERNATIONAL CENTER	

## 創価教育研究センターにおける大学アーカイブズ機能と課題

学 生 発 行	12	1979	二十一世紀の潮流	編集委員会	学生自治会		
	13	1980	出発-八期生記念文集	運営委員会	運営委員会	377.9/Ta12	
	14	1980	創立者の語らいー学生自治会十周年記念出版	記念出版委員会	学生自治会	189.5/I32	
	15	1981	創立者の語らい(上)ー学生自治会十五周年記念出版	記念出版委員会	学生自治会	189.5/I33	
	16	1982	創立者の語らい(下)ー学生自治会十五周年記念出版	記念出版委員会	学生自治会	189.5/I34	
	17	1984	創立者の語らい	学生自治会出版会	学生自治会		
	18	1985	創立者の語らい	学生自治会事務局	学生自治会	189.743/I32	
	19	1987	盟友ー十三期卒業記念文集	富樫正明	13期生会		
	20	1987	PROPOSALS FOR THE 21ST CENTURY	DAISAKU IKEDA	Student Union		
	21	1988	創立者の語らい(上)	学生自治会事務局	学生自治会	189.743/I32	
	22	1988	創立者の語らい(下)	学生自治会事務局	学生自治会	189.743/I32	
	23	1988	桃園ー十四期卒業記念文集	14期卒業委員会文庫部門	14期卒業委員会		
	24	1988	創立者の語らい(昭和60年7月～昭和63年7月分収録)	学生自治会事務局	学生自治会		
	25	1989	君よ君自身たれー十七期卒業記念文集	17期卒業委員会	17期卒業委員会	377.9/So81	
	26	1989	友輝ー十五期卒業記念文集	中岡悦也	15期卒業委員会		
	27	1990	続・創立者の語らい	池田大作	学生自治会	189.743/I32	
	28	1990	岳友ー十六期卒業記念文集	田上賢一	16期卒業委員会		
	29	1991	創立者の語らい 記念講演編 I、II	池田大作	学生自治会	189.743/I32	
	30	1992	創立者の語らい (1)～(4)	池田大作	学生自治会	189.743/I32	
	31	1992	R6 胸中に不屈のサムシングをー十八期卒業記念文集	赤坂幸正	18期卒業委員会		
	32	1995	創立者の語らい (5)	池田大作	学生自治会	189.743/I32	
	33	1996	創立者の語らい (6)	池田大作	学生自治会	189.743/I32	
	34	1996	栄光峰ー二十二期卒業記念文集	松浦正	22期卒業委員会		
	35	1997	創価の長城ー二十三期卒業記念文集	23期卒業委員会文庫局	23期卒業委員会		
	36	1998	心の王者ー二十四期卒業記念文集	24期卒業委員会文庫局	24期卒業委員会		
	37	1999	創立者の語らいー創立者池田大作先生の創価大学への指針より	池田大作	学生自治会	189.743/So32	
	38	1999	大鳳ー二十五期卒業記念文集	25期卒業委員会文庫局	25期卒業委員会		
	39	1999	幸福城ー創価女子短期大学十三期卒業文集	13期卒業委員会	創価女子短期大学		
	40	2000	創大獅子-26期卒業記念文集	26期卒業委員会文庫局	26期卒業委員会		
	41	2000	創立者の語らい(上)	池田大作	学生自治会	189.743/I32	
	42	2000	創立者の語らい(中)	池田大作	学生自治会	189.743/I32	
	43	2000	創立者の語らい(下)	池田大作	学生自治会	189.743/I33	
	44	2000	不滅の太陽ー創価女子短期大学十四期卒業文集	14期卒業委員会	創価女子短期大学		
	45	2001	桜の六期ー六期卒業記念文集		編集委員会		
	46	2001	創大精神ー二十七期卒業記念文集	27期卒業委員会文庫局	27期卒業委員会		
	47	2001	創価の大道ー創価女子短期大学十五期卒業文集	15期卒業委員会	創価女子短期大学		
	48	2001	創価大学三十年誌[学生編]	編纂学生委員会	学生自治会		
	その他	1	1972	第三の大学 創価大学	池田諭	学園書房	377.28/I32
		2	1995	創価大学[シリーズ大学は挑戦する]	悠木夏文	宗教教育文化研究所	377.28/Y99